

芭蕉にも、もう一度お見せしたい。



日本三景・松島にのぞむ国宝、瑞巖寺。「平成の大修理」が完了しました。

松島海岸から海を背に、参道をまっすぐ奥へ。静寂に佇む中門をくぐると目の前に、瓦屋根が山脈のように空に向かってそびえ立つ。松尾芭蕉も旅した名刹、瑞巖寺。いま、鹿島による「平成の大修理」が完了し、1609年の創建以来の姿がそこにある。伊達政宗が京都や和歌山から名工を集めて造営し、木材は紀州熊野、信州木曾からはるばる海路で運んだという。2008年、この桃山文化の一大建築を、長年の腐朽や沈下から救うために。国宝の本堂、廊下など合計8棟に及ぶ保存修理が始まった。本堂は風雨を防ぐ素屋根で全体を覆ってから、骨組だけを残した姿にまで解体。創建時の礎石をコンクリート床で

補強した後、全110本の柱をジャッキアップ。1本1本の柱を腐朽の程度に応じてすべて熟練の手作業で修理した。約5万枚もの瓦は1枚1枚取り付け直し、屋根の全面葺き替えを行った。桃山時代ならではの華やかな室内を飾る漆や障壁画、錆(かざり)金具も、全国有数の匠の技で輝きを取り戻した。貴重な文化財を傷つけることなく、一日一日の修理をそと積み重ねること10年。先人の技術と知恵の結晶を、未来へ引き継ぐ歴史的工事が完了した。月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。芭蕉が「おくのほそ道」にそう書き残したように。400年の時を重ねた瑞巖寺もまた、新しい数百年へと旅を続ける。